

異世界マンガ作画大賞 課題作品4 (女子向け)

◆概要

真面目で純粋な公爵令嬢ユーフェミアは誰の仕業か、【悪役令嬢】と噂されていた。それでも彼女は根を曲げずに真面目に生きて評価され、王子と婚約する…はずだった。

あらぬ誤解から婚約破棄を宣言され、失意に暮れていたユーフェミア。しかし、そんな時小さい頃によく遊んだ幼なじみ・エドワードと再会する。偶然にもエドワードも誤解から【悪役令息】と噂されており、事情を知った彼はユーフェミアにひとつ提案をする。

「僕たち、カップルのふりをしてみんなを見返してやらない？」

悪役令嬢と噂される一方で実は純情なヒロインと、そんなヒロインを追ってきた愛重めな悪役令息と言われるヒーローの、悪役同士の偽装ラブストーリー。

◆キャラクター設定

○ユーフェミア

年齢 18 歳、公爵令嬢

特徴；悪役令嬢と噂されているが、本当は男経験なしの純情。王子から婚約破棄をされた。鈍感で、エドワードからの恋心には気づいていない。愛称はユフィ。

目の色は赤色。髪は薄い紫色で巻いている。

○エドワード

年齢 20 歳、隣国の公爵。

特徴；ユーフェミアの幼なじみ。自分の評価は特に気にしておらず、ユーフェミアしか眼中にない。ユーフェミアが王子から婚約破棄された後に、「アイリスに近づくな！」と王子から釘を刺され、王子の婚約者に色目を使う悪役令息と言われるようになった。

目の色は水色。髪は黒髪で犬のように少しはねた短髪。

○王子

婚約破棄をした人。恋に生きている。アイリスに誘惑され、ユーフェミアとの婚約を破棄した。

○アイリス

王子を落とした伯爵令嬢。男経験多数で、承認欲求が高い。過去にエドワードも落と

そうとしたが、相手にされなかったためお怒り。その後、王子に方向転換した。

◆課題小説（一部シーンを抜粋して、4～8P程度の完成原稿を仕上げてください）

〈冒頭〉

【場所：王宮内のパーティー】

悪役令嬢ーそれは正統派ヒロインを虐めるなど悪事を働き、最終的に婚約破棄を言い渡され、バッドエンドを定められた令嬢である。

今まさに私は婚約破棄を言い渡されている。

王子「ユーフェミア！お前の態度にはもううんざりだ！今まで様々な悪事を見過ごしていたが、アイリスに手を出すなんて！極刑にしないだけありがたく思え！この売女が！」

アイリス「くすん…もうやめてあげて…私は大丈夫だから…」

売女…悪役令嬢と言われているのは耳にしていた。売女と言われたが男性経験どころか、特に何もしていないし、アイリス嬢とお話したのは数えられるほど。頭に葉っぱが引っかかっていると靴擦れをしたみたいで治してあげたとか…おせっかいすぎたかしら？

王子「アイリスの綺麗な髪に花びらが…花もアイリスに見惚れて付いてきてしまったようだ」

アイリス「まあ…！///」

こう言えば良かったのか…!!(しかもそれ葉っぱ!)

王子「とにかく！今後一切、顔を見せないでくれ！（アイリス耳打ち）…ん？ああ、それと…」

婚約破棄を言い渡され、婚約者としての地位を失った私はもうこの場に用は無い。

王子への失望と今後どうしようか…など考えているうちに、王子が何か言っていたが、右から左に流れていき、私は少し経ってその場を立ち去った。

【場所：王宮内庭園】

「ユフィ！」

この声は…

ユ「エド！」

エド——エドワードは私の幼なじみであり、小さい頃はよく一緒に野原を駆け回ったものだった。懐かしい。

両親の長期休暇の折によく遊んでいたが、12歳くらいからは、疎遠になってしまった。

エ「ユフィ…その…さっきのこと（婚約破棄）は気を落とさないで…」

ユ「…え？大丈夫よ！それに、こんな時でも気遣ってくれるエドに助けられたわ。ありがとう」

エ「…やっぱりユフィは笑顔が似合ってるよ」ニコッと笑う

エドとは最近会えていなかったけれど、思わぬ再会にうれしくなる。

(ユフィの心情)

王子とは家同士の政略結婚であり、正直乗り気ではなかった。婚約発表前に他男性から言い寄られることはあれど、淑女であれと言いつけられ、常日頃より王子に寄り添っていたつもりであった。

(婚約者は今まで王子だけ、しかし初めては好きな人としたかったから王子の誘いはのらりくらりかわしていた)

幼い頃、エドに対して淡い恋心はあったけれど…それは友達としての好きだったのかもしれない。さっきは何もなく普通に話せていたし…

ユ「でもエドとなら…」(久しぶりに再会したエドを見て淡い恋心を思い出す)

(中盤—ハプニング)

ア「あらやだ、汚い負け犬の匂いがすると思ったら…お二人ともまだいらしたんですの？」

王子「お前たち！ いつまで我が屋敷の土を踏んでいるのだ！ 無礼者めが！」

(ア「お城のお花たちまで腐ってしまったらどうしよう…私気に入ってたのに…」

王子「大丈夫だよアイリス。腐ってもまた植えさせるさ…それに花は君一人で十分だよ」

ア「もうっ////」

…みたいなイチャイチャを見せつけられる)

ユ「はあ…大変申し訳ございません。」

王子「二人は面識があったのか？ 婚約中に男と密会していたというのも本当だったんだな…呆れ果てた。」

ユ「ちっ違いま…」

王子「まあどうでもいい。俺のそばには世界一可愛いアイリスがいるからな。出来損ない同士お似合いだよ。」

エ「…横から失礼いたします。ユーフェミア嬢とは幼なじみというだけで、久しぶりにお会いして話が弾んでいただけです。断じて今まで密会などしておりません。でも…」

「こんなに可憐な花になっていたなんて…私が育てた甲斐があるというものです。散るときはどんな声で啼くのでしょうか…」グイッとユフィの腰を引く(悪役っぽい言い回し)

ユ「っ…////」

エ「(僕に任せて)」耳打ち

エ「いないなら返していただきますね。」

王子「っ…どいつもこいつも!! 貴様らには邪悪な悪魔が憑いているんだ! すぐに地獄に召されるさ!」退場。

ア「待って王子…!」

「(チッ…クソ女が…)」ぼそつと言う。自分に落ちない男はいないと思っていたが、エドに振り向いてもらえず、またエドにこんなに愛されているユフィに嫉妬する。

〈クライマックス〉

ユ「もっもう離してもいいのではなくて…!？」

エ「ふふっいきなりごめんね」名残惜しそうに一度ギュッと抱き寄せてパッと離す

ユ「もう子ども扱いしてっ…。……それにしても、さっきの「出来損ない同士」って? エドも入っているみたいだけど…」

エ「ああ聞いてなかったんだ。僕もさっき王子に釘を刺されちゃったんだよ」笑

ユ「え? どういうこと？」

エ「アイリス嬢の頭の葉っぱをとろうと髪に触れたら気にさわっちゃったようだ」

ユ「ふふっ私も!」

「私たち悪者同士ね!」笑

(エドがアイリスに近づいたのは、葉っぱもあるけれどユフィの幸せの邪魔になると思って調査していたため)

エ「アイリス、1つ提案なんだけど、」

ユ「なに？」

エ「僕たち、カップルのふりをしてみんなを見返してやらない？」

ユ「…(キョトン)あはは！ エドったら突拍子もない提案ね！」

「なんだか昔みたいだわ。子どもの頃もエドの提案で執事長にいたずらして怒られたっけ」

エ「昔のおちゃめなユフィなら喜んで乗ってくれたけど…王太子妃様は高貴だから受けてくれないかな？」

ユ「ふふっもう王太子妃じゃないわ。おちゃめな悪役令嬢ユーフェミアよ。いいわ！ みんなをぎゃふんと言わせて最後には一緒に怒られてあげる！」

エ「そうこなくっちゃ！ じゃあ形だけでも、」
「ユーフェミア。僕と結婚してください。」

ユ「…！ ええ。喜んで！」

ユ「ちょっと照れくさいわね…」(形だけでもちょっと嬉しい)

エ「僕は見た目から入るタイプだからね！…これからもっと恥ずかしくなるんだから身がもたないよ？」

(エドはガチガチのガチに告白したつもり、これから落とす気満々である)

ユ(…え？/// いっいえ、エドのことはそういう目で見えていないわ！ これはかりそめの結婚よ！ 自覚しなさいユフィ！)

ユ「臨むところよ！ 悪役同士、死なば諸共！ なんてね」

エ にこにこ (まんざらでもない顔、これからどうしようかな～)

ユ てれてれ (OK だしちゃったけれど私これから大丈夫かしら…!?!?!?)